

初期人類学的言語学の伝統：アメリカ音声理論の歴史(Ⅱ)

林, 哲郎
九州大学教養部：教授

<https://doi.org/10.15017/6796153>

出版情報：言語科学. 11/12, pp.57-68, 1976-03. 九州大学教養部言語研究会
バージョン：
権利関係：



初期人類学的言語学の伝統

——アメリカ音声理論の歴史(Ⅱ)——

林 哲 郎

5. ホイットニーと人類学

アメリカ言語学における記述主義の原理は、直接的には、ボアズの『アメリカ・インディアン語必携』(1911)のなかの音声論と形態論に由来するということについては、前に述べた。しかし、アメリカにおいて、言語学的研究が文化と人種という広い背景のなかで、しかも文化人類学のなかの重要な一部門であるとする見解の下でおこなわれたのは、ボアズからであると考えることは、歴史的には正しくないであろう。

サンスクリット語と印欧語の研究におけるホイットニーの文献学的貢献については、広く知られている。彼がアメリカ・インディアン語とその文化についても、きわめて深い関心を怠っていたことは、十分に注意されていないようである。彼の未開人種の言語と文化に関する公平にして人道的な立場からの理解は、その著作のなかの各所での言及によって明らかにうかがうことができる。勿論、ボアズのような専門の人類学者としての立場とは異なって、ホイットニーは、印欧語学者としての観点に基づいて、世界の言語のなかにしめる特殊な言語という認識によって、アメリカの未開人種の言語を考えていたと言えるであろう。

1870年に、ホイットニーはアメリカ言語学協会(The American Philological Association)の会長を辞任する演説のなかで、つぎのような趣旨を述べている。アメリカにおいては、ギリシア・ラテン語などのいわゆる古典語の研究は、これまでに長い伝統があった。そして、今後指導的な地位を占め、さらに注意深い批評を求めつづけるであろう。それゆえに、これはさほど育成する必要はない、と。しかし、彼は、アメリカ・インディアン語に関しては、以下のように強調しているのである。「これに反して、アメリカ土着民の言語の研究は、すでに奨励を受けはじめているが、衷心からの激励を受ける必要がある。」¹⁴⁾

彼の一般言語学に関する第2の著書『言語の生命と成長』(1875)の第13章は、「言語と民族」という表題となっている。このなかで彼は、言語学はかならずしも人種の統一ないしは分派を証明することができるとはかぎらない、と言っている。そして、言語の人種に対する証拠は、なんら物理的特徴を示す証拠ではなくて、「伝達された制度としての証拠であり、十分に導かれたならば、適当な後継者たちによって廃棄することもできる。あるいは、異なった血統の人びとによって採用されることもあり得る」¹⁵⁾と言う。ホイットニーは、言語は社会制度の一種であるという見地から、言語と人種の必然的関係を否定したのである。

ホイットニーは、あらゆる種類の言語をなんらの偏見や先入観なしに研究対象として取りあつかうべきであると考えていた。「健全な言語学的方法は、われわれが遠隔な関連性を調査したり、あえて判断を下だそうとするまえに、それぞれの方言・言語群・分派・語族をそれ自体で

研究することを要求する。したがって、現在われわれがなすべきことは、アメリカ・インディアン語それ自体について、可能なかぎりすべてのことを学ぶことだけである。』¹⁶⁾ この発言は、欧州の文明国の言語に精通していた偉大なサンスクリット学者によるものであることをわれわれは注意する必要がある。

さらに、彼が世界中のどのような言語をも公平に評価していたことは、つぎの引用からも明らかになるであろう。「ホイットニーは、日本政府から日本の公用語として英語を採用することに関して意見を述べるように求められた。しかし、彼は英語が世界語 (Weltsprache) であるという感情的な想念に夢中になって我を忘れてはいなかった」¹⁷⁾ とシーモア (T. D. Seymour) はその『追悼録』のなかで述べている。

以上のように、ホイットニーはみずから生まれ育ったアメリカという国の、実際に接することのできる未開人種の言語に関心を抱かざるを得なかったのである。一般の読者には、彼は文献学者としてよりもむしろ『センチュリー辞典』(1889～91) 全6巻の監修者としてさらによく知られている。この辞典の編集者の一人として、彼は言語学(「綴り字」、「発音」、「文法」、「比較言語学」)の項目を担当執筆したことは言うまでもない。しかし、彼はさらに「民族学」(ethnology)と「人類学」(anthropology)の分野の専門家としての責任編者であったことは、一般には知られていないようであるが、彼の幅広い文献学者・言語学者としての活躍の性格を正しく捉えるためには、注目すべき点である。

これよりさき、『ブリタニカ百科辞典』(第9版, 1885)のなかの「文献学」(philology)の項目を16頁にわたって彼は執筆している。その最初の頁で、彼はつぎのように述べている。

「言語の研究は人類学という一般科学のなかの一部門であり、その対象と方法とに関しては、残余の部門に類似している」(The study of language is a division of the general science of anthropology, and is akin to all the rest in respect of its objects and methods.)

人類学のなかに占める言語学の位置に関するホイットニーのこのような理解は、ボーアズの大著『アメリカ・インディアン語必携』(1911)より20数年も早期であったことは、歴史的に意義深いものである。

要するに、ホイットニーはアメリカ言語学における歴史言語学という部門の創始者であったばかりでなく、アメリカの未開民族の言語研究を中心とする文化人類学の分野においても、先駆的役割を果たしたのである。

6. ボーアズの共時的・記述的方法

文献学者ホイットニーは、印欧語の歴史的・比較的研究という欧州言語学の正統的な立場から、アメリカ・インディアン語に対したと言ってよい。これに反して、人類学者ボーアズは、民族学・人類学の立場からこれらの分野の研究を進めるなかで、必然的に、未開人種の言語と言語が関係する文化とを取り扱わざるを得なかった。

したがって、ボーアズの場合、多くのアメリカ・インディアン語の言語的資料の収集とその分析とが研究の出発点をなしていた。彼は『必携』(1911)の序文のなかで、「アメリカ土着民語の形態論と音声論との重要な特徴」に注意を喚起することと、「それらの文法の分析的研究の必要性を強調すること」がきわめて望ましいと述べている。この点にかぎってみても、ボーア

ズの採った言語学的方法は、まさに「共時的な」(synchronic) 立場であり、「記述的な」(descriptive) 原理に基づいていたのである。

R. A. ホールがアメリカにおける記述言語学の発達を記した節の注釈のなかで、サピアとブルームフィールドに対してボーアズを比較した箇所がある。

「彼ら〔サピアとブルームフィールド〕の研究、業績の偉大さの一端、とくに、記述的分析と歴史的分析とを結合したことは、2人が、印欧語研究者であったからであろう。これに比べ、ボーアズは、歴史言語学の確固たる基礎訓練を受けなかったため、言語変化についての考えも表面的な、散漫家的なものの域を脱することはできなかった。こうした、純然たる散漫家に止まる傾向にあった」。¹⁷⁾

言わば歴史言語学の洗礼を受けなかったボーアズは、ヨーロッパの伝統的な史的方法論に捉われることがなかったために、かえって記述的方法に徹することができたのである。

この点に関して、ソビエト生まれの言語学者でプラーグ学派の一人であったヤコブソン(Roman Jakobson, 1896-)はつぎのように述べている。

「ボーアズは、精神現象を取り扱う科学、ことに言語学においては、みずから独学であったと常に告白せねばならなかった。自学自習は危険なものとなるものであるが、ボーアズの場合、それは彼の偉大な力となった。彼は、言語学と民族学とに重くのしかかっていた色々の偏見と古びた残骸からまぬがれていた」。¹⁹⁾

前述のホールの注釈に見られるボーアズへの非難めいた口調に対して、ヤコブソンによるボーアズの評価は、きわめて同情的であり、また賞賛に近いものである。

7. 博物学から文献学へ(ホイットニー)

アメリカ言語学の先駆者ホイットニーとボーアズは、文化人類学の一部門とされる言語学の分野で活躍する以前に、自然科学に関心を示し、自然科学的方法論に十分に通じていた。この両者の学問的経歴におけるこのような事実は、一般に広くは知られていないようである。しかし、この事実は、アメリカの従来文献学と人類学とに科学的基礎を与えるのに資するところが大きかったという意味において、注目すべきであろう。

まず、ホイットニーの学生時代の事情を調べてみると、1842年に15歳でウィリアム・カレッジに入学していることが解る。言い伝えによれば、この大学の学科課程はウィリアム少年にとっては容易であったので、彼は時間の大部分を山野を駆けめぐって、地質学と鳥類・植物の習性の研究に費していた。しかし、級中の彼の学業成績は常に首席であったと言われている。

この大学を18歳で卒業したのちにも、ホイットニーは父の銀行で金銭出納係をつとめるかわらに、博物学の研究に余暇を当てていた。彼の自然科学に関するこのような趣味は、一般の素人の域を脱していたのである。彼の兄 J. D. ホイットニー (Josiah Dwight Whitney, 1819-1896) は有名な地質学者であった。東カリフォルニア州にある、シエラ・ネバダ山脈のなかの最高峰ホイットニー山(標高4,540米)がこの兄の地質学的功績によって命名されたことは周知のとおりである。この兄の指揮する1849年のシェーペリオール湖畔調査隊に弟ウィリアムは参加した。そして「植物学と鳥類学と会計が彼の担当であった」と記録されている。また、彼は

「地理学的研究でもっとも価値ある援助をおこなった」ということがその報告書に記されている。

ホイットニーの自然科学上の経験は、その文献学上の研究や討論に大いに役立つこととなった。彼がサンスクリット文献の研究に注意を向けたのは、彼の父付きの司祭 G. E. デーイ (George E. Day) というイエール大学のヘブライ語教授で、当時イエール大学の神学部長であった人の影響によるものであった。兄ジョサイヤの書斎には、ヨーロッパから持ち帰ったサンスクリットの書物があって、これをウィリアムは手にする機会に恵まれていたのである。

彼の最初の主著『言語と言語の研究』のあちこちの節に、地質学についての言及がよくなされている。たとえばこの書の巻頭で、言語研究の歴史に触れて、「それは、実際には、観察と帰納を主とする他の学問の歴史——たとえば地質学・化学・天文学・物理学の歴史に似た歴史を有していた」²⁰⁾と述べている。また、「注目すべき、しばしば言及される類似性が、地質学の事実・方法と言語研究のそれらとのあいだに存する」²¹⁾とも言っている。言語の歴史的研究においても、またその共時的的研究においても、ホイットニーの方法は自然科学的特色を示しているのである。

8. 地理学から人類学へ (ボーアズ)

ボーアズは、まったく異なった学問領域から文化人類学という人文科学 (the humanities) の世界へ転じたことは、前述のとおりである。彼は最初に物理学と地理学とを専攻し、その経歴の説明で触れたように、渡米する前にはベルリン大学の地理学の教師を勤めていた。この点に関しては、博物学からサンスクリット文献学へ転じたホイットニーにきわめて類似した学問的転向をおこなったことになる。

ヤコブソンによれば、²²⁾ ボーアズは信頼できる厳密な方法をもとめる自然科学の世界から転じたのであるが、自然科学の習慣を人文科学に対して強制するという野心は有していなかったと言う。彼は、人文科学の自律性を主張するとともにこれを支持し、この2つの分野——自然科学と、人文科学の属する社会科学——に関して十分な学識を有していたがゆえに、この両者を混同することはなかったのである。ボーアズは、人間の言語を精神生活のもっとも重要な表明の一つである ('human language, one of the most important manifestations of mental life')²³⁾と考えていた。彼の言語認識においては、このような性質をもつ言語と文化的現象一般とは、それらの生物学的前提 (biological premises) から注意深く区別されていた。

1883～4年のあいだ、ボーアズはバフィン島 (Baffin Land) への探險に参加したが、この旅が彼の科学者としての関心を地理学から民族学へと転ぜしめるにいたったと言われている。このバフィン島で、彼はエスキモー人と1年間生活をともにし、その言語と人類学の研究に従ったのである。

彼は人類学のなかの各種の部門において、きわめて顕著な科学的業績をあげた。その学問的関心の範囲は、その選集 (1940)²⁴⁾の表題そのものが示すとおり、「人種と言語と文化」であった。同じ人類学の分野であっても、自然人類学 (physical anthropology) と文化人類学 (cultural anthropology) とのあいだの科学的な立場による区別については、ボーアズは明確な判定をくだしていたのである。

言語学が純然たる自然科学ではなくて、むしろ社会科学に属するものであるという考え方は、

ホイットニーにおけると同様に、ボーアズにおいても強く支配していた。ヤコブソンはこの両者の言語観に触れて、つぎのように説明している。

「ホイットニーの考えは国際的な言語思想に力づよい決定的な影響を及ぼしたが、言語学は社会科学に属し、自然科学に属さないということの説得力ある証明によって、ヨーロッパの学者たち（たとえば、レスキーン、マサリク、ド・ソニユール）により特に賞賛を受けた。ボーアズとその弟子サビアも、言語科学における旧来の自然科学的な逸脱とたたかい続けたのである」。²³⁾

ここでヤコブソンが主張していることは、印欧語比較言語学において、伝統的な自然科学的な考え方がシュライハー (August Schleicher, 1821-68) の示した言語系統に関する樹枝状の分岐図に依然として残っているということである。この比較言語学における伝統的な考え方は、分類の基準を語もしくは形態中心の類似性に求めていた。これに対して、ボーアズはむしろ統語的と音韻的類型における構造的類似性 (structural similarity) による言語の分類をおこなった点をヤコブソンは高く評価している。

もちろん、自然科学的方法が、ホイットニーが述べているように、観察と帰納に基づいているかぎり、それが人文科学に属する言語学と人類学にとっても重要であることは明らかである。

「おそらく、ボーアズの科学に対するもっとも偉大な貢献であり、とにかく、われわれがその真価をもっともよく理解し得る貢献は、記述的言語研究の発達ということであった」(Perhaps, his greatest contribution to science, and, at any rate, the one we can best appreciate, was the development of descriptive language study)²⁶⁾

この点に関するブルームフィールドの以上のような評価は、まことに妥当であると言えよう。ボーアズにおける記述主義に関しては、さらに後の節において考察するはずである。われわれは、ボーアズの言語研究における記述主義が物理学や地理学などの自然科学の方法論から学ばれたものであったことに注目しよう。

ブルームフィールドは前述の引用につづいて、さらにつぎのように述べている。

「わが国の土着民言語は、これまで何人かのきわめて才能ある人たちによって研究されてきたが、誰ひとり、この研究を科学的基盤の上に乗せることに成功したものはなかった」。

ボーアズの記述主義を中心とする科学的基盤 (a scientific basis) による言語研究を、ブルームフィールドは賞賛したのである。

注意すべきは、自然的な環境が言語に対して実際に影響を及ぼすかという問題については、ボーアズは否定的であったことである。このことに関しては、彼の結論だけをつぎに引用しておこう。

「言語の関するかぎりでは、地理学的環境と気象の影響はきわめて疎遠であるように見える。人間という有機体全体とその発声器官が直接に地理的環境によって影響を受けるということが証明できないかぎり、この要素が言語の形成と変化にとっての本質的な特性をなすと考えられることができるとは思わないし、なおさら、隣接地域の言語の類似性を説明するのに用いられる原因と考えることもできない」。²⁷⁾

9. 人類学的手段としての言語学

アメリカ・インディアン族の習慣や信仰などに関する人類学的研究のために、彼らの言語そのものの研究の果たす役割について、ボーアズは2つの事がらを考えていた。

- (i) 民族学的研究という目的のために、その言語の研究が実際的に必要である。
- (ii) アメリカ原住民語そのものが一般の人類学的現象の一部をなしている。

人類学と言語学の関係はきわめて密接であって、これら(i)と(ii)の2つの立場は、判然と区別されないままに論じられることが多かった。ボーアズの以下に述べるような見解は、十分に参考とするに足るものである。

まず、(i)の立場は、原住民語について習得した知識を手段として、これによってインディアン族との直接の対話から民族学的現象をとらえようとするのである。従来は、インディアン語を理解する通訳から提供される不十分な資料に基づいて、研究を進めることが多かった。また、実際には、通訳がいなくても、インディアン族と白人との交渉は、両者のあいだに発達したいわゆる取引用語 (trade-language) によって、多くの地域での民族学の調査がおこなわれたのである。しかし、この取引用語はその語彙数にかぎりがあって、日常の具体的な生活に関することがらの範囲内では役立つにしても、未開人種の宗教的・哲学的思想などに関する情報を得ることは、ほとんど不可能であった。

科学者としてのボーアズの研究態度は、このような通訳の援助という点に関しても、きわめて注意深く、また厳正であった。研究者がある優れた通訳とともに調査をおこなう場合、その通訳が研究者自身の有する見解を鼓吹して、そのために得られた情報が歪曲されることがある。ボーアズは、通訳の先入観のために、インディアン族の与える解答に基づいて、通訳自身が一つの理論を形づくってしまうことがあるという危険性を十分に警戒していたのである。

このようなボーアズ自身の経験から、彼は民族学研究における言語学の必要性をつぎのように説明している。

「〔インディアン族の〕言語を駆使できる能力は、正確で完全な〔民族学的〕知識を獲得する不可欠の手段であると言わなければならない。その理由は、原住民の会話に耳を傾け、彼らの日常生活に参加することによって、多くの情報が得られるからであり、このようなことは、その言語を駆使できない観察者には、まったく近づくことのできないままに終わってしまうからである」(We must insist that a command of the language is an indispensable means of obtaining accurate and thorough knowledge, because much information can be obtained by listening to conversations of the natives and by taking part in their daily life, which, to the observer who has no command of the language, will remain entirely inaccessible.)²⁸⁾

未開族の言語への熟達には確かに理想的な目標であり、それに到達することはむずかしいということは、ボーアズには十分に解っていた。しかし、次節で述べるようなインディアン語についての理論的知識があれば、その実際の知識によって得られるような情報のなかの少なくとも一部分は獲得できると彼は考えていた。

土着民の言語をよく理解し、これを自由に使えることは、直接的に民族学的情報を入手でき

るという点で有利であるだけでなく、また取引用語では得られない広範囲の民族学的主題について学ぶことができることは言うまでもない。このようにして、民族学的文献の正確でゆたかな情報を安心して利用できることに、ボーアズは言及している。

また、ある場合には、教育を受けたインディアン自身に、その所属する部族の研究をすすめて、みずからの土語によってその観察の結果を記録させることも可能であった。これらは英語による記録よりもはるかに優れている、とボーアズは説明している。

インディアン語を自由に使える能力がない場合には、民族学のなかでさらに深遠な内容をふくむ問題は、これをよく取扱うことができないことも生じてくる。たとえば、インディアン族の詩歌を研究する場合には、いかなる翻訳もその原文にかわり得るものではない、とボーアズは述べている。その詩のリズムの形式、詩語の取扱い方、原文とその音楽への調整、影像、比喩的用法というようなものは、直接にインディアン語の知識がなければ説明できない。同じことは、多少とも詩的な語句をとまなう儀式用語・祈禱・呪文に関しても当てはまると言う。

このほかに、インディアン族の個人名・部族名・地名というように固有名詞も、言語研究の成果によらなければ十分に説明できないインディアンの生活様式の一部であると言う。たとえば、インディアンの名称の訳として、“Sitting-Bull”, “Afraid-of-His-Horse” のような例が広く知られている。

以上のように、アメリカ原住民の言語に関する知識は、彼らの風俗・習慣・信仰というような人類学的主題をより深く理解するための補助 (adjunct) として役立つものである。このような場合、言語が与える効用は実用的な (practical) ものであって、それは

「人類学的現象をより明らかに理解するための一手段であって、その現象それ自体では、言語問題とはなんら関係がない」 (a means to a clearer understanding of ethnological phenomena which in themselves have nothing to do with linguistic problems)²⁹⁾

という観点に、ボーアズは立っていた。

民族学的主題を取扱う場合に、その民族の言語を手段として用いることがもっとも優れており、便利でもあり、そしてまた信頼性が高いということのために、ボーアズは、人類学の手段としての言語の効用をきわめて高く評価したのである。しかし、言語そのものと文化現象とのあいだの関係は、一般に考えられているのとは反対に、必然的なものではないとボーアズは主張している。この点の考察は、かなり重要な意味をもつものである。

10. 未開人種の言語と思想

人類学のために言語研究の実際の効用を指摘したボーアズは、第二の立場として、インディアン族の言語そのものの理論的研究が重要であることを説いている。「純粹に言語学的な研究は、世界の諸民族の心理状態に関する徹底的な研究の本質的な部分をなしている」と彼は考えた。

未開人種の言語現象と人類学的現象とのあいだの関係、ことにこの両者のあいだに存する差異についてさらに考えてみる必要がある。しかし、その問題に移るまえに、ここでは、さらに根本的な性質をもつ「言語と思想」の関連性について、ボーアズの見解を調べることにしよう。

彼は、近代ヨーロッパの諸言語とアメリカ・インディアン語を比較することによって、言語表現と思想、とくに抽象的な一般概念の表わし方との関係について考察している。ある民族の思想の簡潔性と明瞭さとはかなりの程度までその言語に依存する、とこれまで主張されてきた。ことに、ヨーロッパの近代の諸言語は抽象的な概念を単一の語でたやすく表現できるし、一般概念を単一の文のなかにはめこむことが容易である。そして、このことはヨーロッパ人の概念が明皙であり、その思考に論理的な力があり、不必要な事項は思想から確実に除去できるということの基本的な条件となっている。このような見解が従来広く受け入れられてきた、と言う。

ボーアズは、ヨーロッパ語の代表としての英語とアメリカ・インディアン語との表現の違いをつぎのような例で説明している。

(i) 英語: The eye is the organ of sight.

(ii) 未開人語: An indefinite person's eye is his means of seeing.³⁰⁾

すなわち、英語の‘the eye’や‘organ’は、「眼」とか「器官」という一般概念を表わしている。しかし、多くの未開人語においては、‘this eye here’というように、ある一人の人間もしくは特定の動物の「眼」という表現しか用いられない。「器官」についても、単一の語によって一般的な「器官」を示すことは不可能であって、‘an instrument of seeing’のような連語により、特殊化した言い方が起こるだけである。

また、対象と関係のない性質(quality)を示す語、行為者や主体という観念から離れた活動(activity)や状態(state)を表わす語は未開人種の言語にはほとんど見出されない、とボーアズは観察している。たとえば、「ある人の善行」という表現はあるが、「善」という一般概念に相当する語はない。ヴァンクーバー島のクワキウトル(Kwakiutl)語では、所有格をともなった語法以外に抽象概念を示すことはないと言われている。そのような例として、‘his love for him’とか‘my pity for you’に当たる用法は普通であるが、‘love’とか‘pity’を示す一般概念の語は孤立して用いられないのである。

しかしながら、インディアン族は、「眼」とか「器官」の例のような特殊的な表現によっても、一般概念は十分に表現されるものであるとボーアズは考えている。一般概念を示す言語形式が未開人種に欠けていることは、彼らにとってはその必要性が欠けているからである、という理由が想定される。そして、クワキウトル語の話し手に、そのような抽象概念を展開させることが容易であった、という実験例を示している。この点に関するボーアズの結論は、つぎのようになっている。

「[未開人によって]表現の一般的形式が用いられないという事実は、これを形成する能力の欠けていることを証明するものではなくて、単にその種族の生活様式がそれを必要としないものになっていることを示すにすぎない」(The fact that generalized forms of expression are not used does not prove inability to form them, but it merely proves that the mode of life of the people is such that they are not required.)³¹⁾

したがって、未開人種も文化的な必要に迫られたら、抽象概念を十分に表現することができる、と言う。

以上の説明から理解されることは、未開人の言語形成のなかに一般思想を表わすのに内在的な障害となるものは、大した重要な意味をもつものではないということである。「もし文化の一

般的状態がそのような思想の表現を必要とするならば、言語のみがある民族をして、一般的な思考形式へと進むことを妨げることはないであろう。また、このような条件の下では、言語は文化の状態によって形づくられることになるであろう」。しかし、ボアズはこの箇所の表現は、仮想法によっていることは注意すべきである。したがって、言語の形式が文化の状態によって形づくられるかぎりということを別にすれば、

「ある種族の文化とその話す言語とのあいだに、なんら直接的な関係があるとは思われない」
(It does not seem likely, therefore, that there is any direct relation between the culture of a tribe and the language they speak.)³²⁾

ということになる。

ボアズは、これに対してつぎのように付言している。「文化のある種の状態が言語の形態論的特徴によって条件づけられるかぎり」というときには、両者のあいだに関係が認められるであろう、と。要するに、言語は民族や民族の文化から離れて、自律的な形で存在し得る性質を持つものであると彼は考えていた。しかし、文化の様式が必要とする場合には、その必要性を充たすに足る言語を発達させ、その言語によって表現される思想を生み出すとするのであるから、文化と言語の関係を全然否定してしまう立場ではなかった。このことは、それぞれ特殊の文化を有する民族そのものと言語との関係についても、妥当する考え方であった。かくして、ボアズは、言語は社会制度の一種であるとする立場から言語と人種の問題を否定したホイットニーの伝統的な思想を受け継いでいたと言えよう。

11. 人類学の一部としての言語学

言語学が人類学のなかの一部門をなしているというホイットニーの先駆的な見解については、すでに§5において述べた。ボアズはその専門とする文化人類学の立場から、ホイットニーと同じ考えに到達していたのである。

まず、ボアズの見解によれば、自然民族学 (physical anthropology) は別として、文化人類学 (cultural anthropology) は、自然科学の部門ではなくてむしろ人文科学に属するものである。このような考え方は、彼の民族学に関する定義そのものからも理解されるであろう。すなわち、

「民族学は世界中の諸民族の生活の精神現象を取扱う科学であると理解される」(Ethnology is understood as the science dealing with the mental phenomena of the life of the peoples of the world)³³⁾

ということが正しいとするならば、人間の精神生活の表現の一種である言語は、当然のことながら、民族学の研究分野に入るものであるとしている。

つぎに、ボアズは言語現象 (linguistic phenomena) と民族学的現象 (ethnological phenomena) とのあいだの関係、とくにそのあいだに存する相違に注意すべきであると言って、つぎのように述べている。

「言語的分類は決して意識に上ることはないが、他方、ほかの民族学的現象においては同じような無意識的な起源が広く見られるにしても、これらはしばしば意識に上り、かくして第

二次的推理と再解釈を生ぜしめる」(the linguistic classifications never rise into consciousness, while in other ethnological phenomena, although the same unconscious origin prevails, these often rise into consciousness, and thus give rise to secondary reasoning and to reinterpretations)³⁴⁾

言語現象は、言語的分類や言語の法則をふくめて、その言語の話し手にはまったく気づかれな
いままて展開する。しかし、他の民族学的現象は、未開人種にとっては多少とも明白に、意識
的な思考の対象となるものである。

以上のような言語現象の無意識的な性質 (the unconscious character of linguistic phenomena) について、ボーアズは繰返し強調している。彼は、さらに言語のなかの音声的要素の
無意識性に関しても言及している。単一の音声はなんら独立した存在ではなく、またそれは発
話の過程においては話者の意識に浮ぶことはない。ただし、それは一定の意味を担う音声複合
体の一部 (a part of a sound-complex) としてのみ存在する、とボーアズは言っている。た
とえば *hills* において、語尾の -s は複数という観念を表わし、区別された意味をもつ別個の
要素として英語国民の話し手の意識に入ってくることは決してない。勿論、文法的な訓練を重
ねることによって、複数語尾 -s を添加することにより形づくられるという事実を教えられ
ているかぎりは別である。この *hills* という語は、しっかりとまとまった単位を構成し、全体
としてのみある意味を伝えるものである。単一の音声的要素は、分析の結果としてのみ意識さ
れるものである、と説明している。³⁵⁾

ボーアズのこのような解釈をヤコブソンはきわめて高く評価している。「言語過程の無意識
性」という認識は、ボーアズがこれまで発表してきたなかでもっとも大胆にしてもっとも創意
に満ちた革新的な思想の一つである、³⁶⁾ とまで激賞しているのである。ボーアズも、そしてそ
の弟子であったサピアも、この重要な前提から適切な結論を導き出す方法を知っていたのであ
る。

言語の基本的な観念は、言語共同体によって絶えず用いられているにしても、それらの観念
はその成員の意識に上ることにはない。したがって、個々の成員の意識はその言語の文法的・音
素的構造型 (the grammatical or phonemic pattern) を通常妨げるものではなく、その結果、
「第二次的推理と再解釈」をひき起こすこともなくなる。これに反して、基本的な民族学的現
象は、この個人の意識的な「再解釈」によって、その現象の歴史的な経過やその現象の成立そ
のものを曖昧にし、複雑にしているのである。しかし、言語構造の形成においては、このよ
うな「再解釈」によって誤解に導いたり混乱させたりする要因がなく、それを跡づけることが
できる。

この点に関するヤコブソンの説明は、つぎのとおりである。言語の基本的な単位は、その単
位が意識のなかに入ってくる必然性もなく、そしてまた無教育の思考のそれぞれの対象となる
こともなく、機能するものである。それらの単位は、たがいに孤立させることはほとんど不可
能である。その結果として、

「言語における個人意識の相対的な非干渉ということが、その言語の構造型の厳しくて至上
命令的な性格を説明する」(this relative non-interference of the individual conscious-
ness in language explains the rigid and imperative character of its pattern)³⁷⁾

ということになる。ボーアズの「言語現象の無意識性」という説明は、将来サピアにおいてさらに明確な形で、言語における「形式的構造型」と「音声構造型」という重要な概念に発展させるのに影響があったという意味において、言語学史的に意義深いものである。

つぎに、ボーアズの達した結論を引用しておく。言語研究が人類学的研究のもっとも重要な一部門となる理由として、つぎの2点を彼は示している。

「人間の言語が表わす基本的な概念は、質的には民族学的現象から区別されるものではない。そしてさらに、諸言語に独自の特徴は、世界中の諸民族の見解と習慣のなかに明らかに反映されているからである」(because . . . on the other hand, the fundamental concepts illustrated by human languages are not distinct in kind from ethnological phenomena; and because, furthermore, the peculiar characteristics of languages are clearly reflected in the views and customs of the peoples of the world)³⁸⁾

言語学と人類学ないしは民族学との関係についてのボーアズの見解は、アメリカ初期の言語学においては、正統的なものとして、その弟子たち——クローバー、サピア、スワデッシュ等に伝えられることになる。

注 釈

- 14) T. A. Sebeok (ed.), *Portraits of Linguists: A Bibliographical Source Book for the History of Western Linguistics, 1746-1963* (Indiana University Press, 1966), Vol. I, p. 413.
- 15) Whitney, *Life and Growth of Language*, pp. 271-2.
- 16) Whitney, *Language and the Study of Language*, p. 351.
- 17) T. D. Seymour, "William Dwight Whitney," in Sebeok (ed.), *Portraits*, I, p. 423.
- 18) 興津達郎訳注, 『アメリカ言語学史 1925-1950』(大修館, 1958) p. 18, 脚注。
- 19) R. Jakobson, 'Franz Boas' Approach to Language,' *IJAL* (1944), 10.4, p. 188.
- 20) Whitney, *Language and the Study of Language*, p. 1.
- 21) *Ibid.*, p. 47.
- 22) Jakobson, *Op. Cit.*, p. 188.
- 23) Boas, *Handbook*, I, p. 63.
- 24) Boas, *Race, Language and Culture* (1940).
- 25) Jakobson, *Op. Cit.*, pp. 192 f.
- 26) Bloomfield, 'Franz Boas [an Obituary],' *Language* (1943), 19. 2, p. 198.
- 27) Boas, *Handbook*, I, p. 56.
- 28) *Ibid.*, p. 60.
- 29) *Ibid.*, p. 63.
- 30) *Ibid.*, p. 64.
- 31) *Ibid.*, pp. 65-66.
- 32) *Ibid.*, p. 67.
- 33) *Ibid.*, p. 63.
- 34) *Ibid.*, p. 67.
- 35) *Ibid.*, pp. 22-24.
- 36) Jakobson, *Op. cit.*, p. 189.

37) *Ibid.*, p. 189.

38) Boas, *Handbook*, I, p. 73.

Tradition of Early Anthropological Linguistics

—A History of American Phonological Theory (II)—

Tetsuro Hayashi

5. Whitney and Anthropology

It is important to realize that prior to the anthropological work of Franz Boas, W. D. Whitney started making linguistic studies in a wide perspective of culture and in an ethnological setting.

Whitney emphasized the encouragement of scientific studies in the cultures and languages of the American Indians on the occasion of his presidential speech (in 1870), and afterwards discussed the relation between language and race in a chapter entitled 'Language and Ethnology' in his *Life and Growth of Language* (1875). He held an impartial view of languages whether 'primitive' or cultivated, and proceeded to make research in the languages of the American indigenous tribes without any prejudice or preoccupation.

This eminent Sanskritist is more widely known as editor in chief of the *Century Dictionary* (1889-91) than as a specialist-writer contributing such articles as 'philology,' 'ethnology,' and 'anthropology' in the same dictionary. It is worth noticing that his remark, 'The study of language is a division of the general science of anthropology' in 'Philology' (The *Encyclopaedia Britannica*, 9th ed., 1885), is one of the earliest pronouncements concerning the recognition of the scope of anthropological linguistics in America.

6. Synchronic and Descriptive Approaches of Franz Boas

The fundamental principle of Boas' anthropology rested on the accurate and complete recordings of ethnological data and the objective analysis of the materials collected. In his preface to 'Introduction' of the *Handbook of American Indian Languages*, I (1911), he calls attention 'to the essential features of the morphology and phonetics of American languages' and insists upon 'the necessity of an analytical study of grammar.' His linguistic study was from the beginning characteristic of a synchronic and descriptive principle.

Unlike E. Sapir and L. Bloomfield, as R. A. Hall, Jr. puts it, Boas never had a firm grounding in historical linguistics, and 'never got beyond the rather superficial "diffusionist" conception of linguistic change.' On the contrary, Roman Jakobson praised Boas' approach to language as quite free from preoccupation and prejudice which prevailed in the methods of the traditional philological-ethnological studies.

7. From Natural History to Philology (Whitney)

Before turning to the study of the Sanskrit literature and general linguistics, W. D. Whitney was deeply concerned with natural sciences, such as natural history and ornithology. As early as 1849, he participated in the Expedition of Lake Superior, which was conducted by his brother, Joseph D. Whitney, a famous geologist, and William is reported to have been in charge of financial accounts and ornithology, and to have made a valuable aid in geographical studies.

Here and there in his main work, *Language and the Study of Language* (1867), we come across his references to geology and geological approaches in comparison with linguistics and linguistic methods. His attitude of treating and confronting languages was based on a scientific principle, especially when he was forced to deal with the synchronic aspects of linguistic phenomena.

8. From Geography to Anthropology (Boas)

Just like W. D. Whitney who was a pioneer of both linguistic and anthropological studies in America, Franz Boas changed his earlier career of academic studies from natural sciences, such as physics and geography, to cultural anthropology as one of the divisions of the humanities. Thus, he was very careful not to confuse linguistics as a social science with linguistics as a natural science. He believed that human language is 'one of the most important manifestation of mental life.'

Boas' ethnological experience in Baffin Land (1883-4) was of great consequence, because it proved a significant motivation for his turning to an anthropological study, and was helpful for him to make a distinction between physical and cultural anthropology. According to Jakobson's account of Boas' study, both Boas and his disciple Sapir tried to battle with a naturalistic deviation of linguistic interpretation in an older stage of the development of Indo-European linguistics, and emphasized structural similarity between the elements of languages against a naturalistic view of the classification of languages which was conceived by A. Schleicher.

L. Bloomfield also appreciated the contribution of Boas to 'the development of descriptive language study,' and highly evaluated Boas' studies of American Indian languages carried on a scientific basis. Concerning the relation between ethnology and linguistics, Boas was of the opinion that geographical environments have nothing to do with the formation and modification of languages.

9. Linguistics as a Means of Anthropology

Boas' concept of language study for an anthropological purpose might well be treated concerning the following items:

- (i) the necessity of language study for the purposes of ethnology.

- (ii) the recognition of an American Indian language as part of anthropological phenomena in general.

In an early stage of American anthropological studies, it was usually interpreters who provided white scholars with anthropological data, and the so-called 'trade-language' was developed between the Indian tribes and white ethnologists. Boas' opinion about this phase of studies was that a command of a certain Indian language was an indispensable means of obtaining accurate and thorough knowledge of anthropological phenomena.

On some occasions, educated Indians were employed to make recordings of what they themselves observed in their own tongues. Boas' explanation is that without a direct command of the Indian language in question, Indian poems, their ceremonial terms and charms as well as proper names could not be adequately clarified. Thus, the knowledge of Indian languages is 'an adjunct' to a deeper understanding of ethnological phenomena.

10. Language and Thought of the Primitive Tribes

Boas' second view on the relation between linguistic study and ethnology is that a genuine study of the Indian languages forms an essential part of the peoples' psychological phenomena. It has been generally believed that modern European languages are much easier to express abstract ideas in single words and generalized conceptions in a single sentence than the languages of the primitive tribes.

It is interesting to examine Boas' comparison of English as a representative of European languages with an Indian language.

(i) English: *The eye is the organ of sight.*

(ii) Primitive language: *An indefinite person's eye is his means of seeing.*

An English word *eye* or *organ* in this example is used to express a general idea, while the primitive peoples can only remark 'this eye here' or 'his instrument of seeing' as a specialized term. In the Kwakiutle language spoken in a part of Vancouver Island, only such expressions as 'her love for him' or 'my pity for you' occur, but 'love' or 'pity' as expressing a general idea does not.

Boas' conclusion is this: 'the fact that generalized forms of expression are not used does not prove inability to form them, but it merely proves that the mode of life of the people is such that they are not required.' Accordingly, as Boas remarks, when the primitive people were confronted with the necessity of making generalized forms of expression by a general state of culture, they were not prevented to pass into the state of ability to express such ideas.

11. Linguistics as a Part of Anthropology

Boas' belief in academic disciplines is that cultural anthropology should belong to the humanities, not to natural sciences, because anthropology including ethnology, Boas remarks, is 'a science dealing with the mental phenomena of the life of the peoples.'

Thus, Boas calls attention to the difference between linguistic phenomena and ethnological phenomena. The former, he claims, never rises into consciousness of the people in a verbal community, while the latter does often rise into their consciousness. 'The unconscious character of linguistic phenomena,' frequently referred to by Boas, was highly praised by Roman Jakobson. Boas' concept of the unconsciousness of linguistic phenomena eventually led to the setting-up of the imperative character of formal or phonetic patterns of language which was later taken up and adequately formulated by his disciple Edward Sapir.

Linguistic study, according to Boas' opinion, constitutes the most essential part of anthropology, (i) because 'the fundamental concepts illustrated by human languages are not distinct in kind from ethnological phenomena,' and (ii) because the peculiar characteristics of languages are clearly reflected in the views and customs of the peoples of the world.